

荒木恵作 「もう一人の自分」

<前編>

- (効果音) (教室のガヤ)
- 上木茂 おう、哲也、今日ゲーセン行くだろ？
- 村上哲也 あ ああ、もちろんだよ。
- 茂 じゃあ部活終わってから、いつもの場所で。
- 哲也 オーケー。あ、少し遅れるかもしれない。用済ましていくから。
- 哲也モノローグ 何でいつもこうなんだろ、おれって。行きたくもないのに、誘われるとホイホイ乗っちゃう。
- 哲也ナレーション おれ、村上哲也。青春高校 1 年。今声をかけてきたのは、友達の上木茂。同じ野球部の仲間で、今一番仲がいいと思ってる。青春真っ最中の若者であるおれが、どうして悩んでいるのかと言うと、自分の性格が原因なんだ。人付き合いは、我ながらすっごくいいと思ってる。だけど何か違うんだ。今のおれは本当のおれじゃない、絶対に！
- (部活の掛け声)
- 安西監督 よーし、集まれ！ 今度の^{たかね}高嶺高校との練習試合のメンバーを発表する。ピッチャー高橋、キャッチャー水谷、ファースト…。
- 茂 (小声で)哲也、今日部活が終わったあと、コンパがあるから付き合いえよ。
- 哲也 コンパ？
- 茂 ああ。「サンモール」っていう店でさ、ほら、駅前の。
- 哲也 分かるけど、おれ、そういうの苦手なんだよな。
- 茂 バーカ。こんなのにな得意も苦手もあるかよ。とにかく部活終わってからすぐだからな。
- ナレーション そんなわけで、おれと一緒にコンパに行くことになった。部活が終わったあと、重い体を引きずるようにして、駅のほうへと向かった。
- (音楽) (喫茶店の BGM)
- 店員 いらっしやいませ。
- 小沢知美 茂ー！ こっちこっち。
- ナレーション そこには 2 人の女の子が座っていた。一人は同じクラスの小沢知美。野球部のマネージャーをやっている。もう一人の顔を見ておれは驚いた。
- 前田るり子 久しぶり、哲也君。
- 哲也 あ、あの…前田さん？
- ナレーション それは、中学の時同じクラスだった前田るり子だった。確か中 3 の夏ごろまでは、何か暗くて目立たない子だったのに、夏休みが終わったらガラリ変わって

て、すごく明るくなってクラスみんなが驚いた。何でも、その夏にクリスチャンになったとか言っていた。今は高嶺高の野球部のマネージャーをしているとかで、春の選抜で茂たちと知り合って、そのあと時々会っているそうだ。

茂る なあんだ、知り合い？ よかったじゃん哲也。こいつったらさあ、苦手だとか言
って来るつもりなかったんだぜ。でもまあよかったよ。

ナレーション しばらく話した後、おれは前田さんと帰ることになった。

るり子 哲也君、全然変わってないわね。学校は楽しい？

ナレーション これは、おれが一番聞かれたくない言葉だった。でもおれはすぐ答えた。

哲也 うん、楽しいよ。部活は大変だけど、友達なんかもみんないいやつばかりだし、気遣わなくて済むんだ。

モノローグ またこれだ。問題や悩みを抱えていても。そんなものまるでないかのように、
おれの口が勝手に動いてしまう。

るり子 そうなんだ。でもよかった、元気そうで。ちょっと気になってたんだ。ほら、中学3
年の時、隣の席になったでしょ。その時思ったのよ、「哲也君、疲れてるな
あ」って。すごく余計なお世話かもしれないけど、もっと気分的に楽に過ごした
ほうがいいと思うな。あ、じゃわたしこっちの道だから。

ナレーション そう言って、前田さんは行ってしまった。おれは何とも言えない気持ちになっ
た。その日からずっと、前田さんの言った言葉が頭から離れなかった。

るり子 (エコー) 哲也君、疲れてるよ。もっと気持ち楽にしなきゃ。

ナレーション 夏休みも終わり、新学期で部活も再開された。

監督 2 学期が始まったばかりだが、そのボーっとした頭を直すために、今度の土
日合宿を行う。

(全員) 「えー」「何でー」などボヤキ声。

監督 静かに！ その日のメニューはマネージャーに任せてあるから、確認しておく
ように。

茂 何でまた合宿なんだよ。なあ。この前やったばかりじゃん。

友達 A ほんとほんと。監督って何考えてんだか分かんないよ。

マネージャー ごちゃごちゃ言ってないで、はい、これがメニュー。

友達 A 欲しくないよー。

ナレーション こうして 2 学期早々の合宿が始まった。土曜日の昼から日曜日の夜までと、1
泊 2 日のハードなスケジュールだった。

マネージャー …以上の事を守って、スケジュールにそって練習してください。表はドアには
ってあります。

友達 B マネージャー。質問なんですけど、お風呂に入る時間はあるんですか？

マネージャー ちゃんと 15 分間用意してありますので、ご安心ください。

(全員) 「げえ、15 分かよ」「短すぎる」など。

監督 (手をたたいて)ほら静かにしろ！ 15分もあるんだからありがたく思え。それから夜のことだが、速やかに眠るように。あまり遅くまで起きていると、朝からのスケジュールについていけないぞ。以上。

(全員) ありがとうございます。

キャプテン よーし。じゃあ練習を始めるぞ。まず土手までマラソンだ。30分以内に帰ってこいよ。

マネージャー 用意、スタート！

ナレーション おれたちは一斉に駆け出した。このマラソンコースは、仲間内では“地獄のコース”と言われていて、かなり苦しいコースだった。走っている最中に、茂が声をかけてきた。

茂 哲也、今晚のことなんだけど。

哲也 何だよ。

茂 どっか遊びに行かないか？

哲也 ええ!?

茂 バカ！デカイ声出すなよ。スケジュール見たら結構ハードじゃん。だから、どうせ夜中にみんな起きないと思ってさ。

哲也 別に、いいけど。

茂 じゃあ、あとで。

哲也 それだけ言うと、茂は走って行ってしまった。何て勝手なやつと思いながらも、ついオーケーしてしまう自分が情けなかった。

モノローグ どうしておれはいつもこうなんだよ。どうして「ノー」と言えないんだ？

ナレーション 落ち込んでいる中でも、時間は一刻一刻と過ぎてゆき、1日目の合宿が終わった。

マネージャー ご苦労様でした。では今から15分間おふろの時間にします。そのあとゆっくり休んでください。では解散します。

(効果音) (ガヤ)

茂 (小声で)哲也、あとでな。

ナレーション 夜中11時を過ぎて、みんなが寝静まったころ、おれたちは学校を抜け出した。暗やみの中で光る月が、おれたちを見張っている気がして怖かった。

茂 やっぱ夜はいいよな。何でもできる気がして。これからカラオケに行こうぜ。

哲也 うん。

ナレーション あまり気が進まなかったが、こんなところにもしょうがないので、ついていくことにした。街は、夜中だというのに騒がしかった。

(音楽) (カラオケ店内)

ナレーション 3、4時間歌ってから、おれたちは静かに学校へと戻った。次の日――。

監督 おはよう。今日も気合いを入れて練習をするように。まず筋トレだな。そのあと、球出しをするから、ちゃんと準備しとけよ。

(全員) はい！

監督 じゃあ解散。

(全員) ありがとうございます。

ナレーション やはり昨日の疲れと寝不足のせいか、体が思うように動かなかった。昨日よりハードなスケジュールが次々と体当たりしてきて、もう体はクタクタだった。異常に長く思えた一日が過ぎ、合宿は終わった。

マネージャー お疲れ様でした。これで今回の合宿メニューはすべて終わりです。帰ってゆっくり休んでください。では解散します。

ナレーション おれは重い体を引きずるようにして家へと帰った。

哲也 ただいま。

母 お帰り。合宿どうだった？ その顔だとかなりきつかったよね。

哲也 うん、もうクタクタだよ。

妹美智子 お兄ちゃん、お帰り。あのね、これあげる。

哲也 何だよ、これ。

美智子 カードだよ。今日か医学校で作ったの。「一杯あるからお友達にも持って行っていいですよ」って言われたから、お兄ちゃんに分持ってきたんだ。

哲也 ふーん。

ナレーション 妹の美智子にもらったカードは、いかにも子供が書いたという字で、何か書いてあった。その日は何もする気になれずに、ベッドに入った。次の日――。

(効果音) (終業のチャイム)

(全員) 「ああ、これから部活だ」など。

友達 A 哲也、今日の練習、グラウンド？ それとも土手？

哲也 今日はいいい天気だから、土手じゃないかな。

友達 B やっぱりな。ああ、やだな。哲也出んのかよ。

哲也 うん、そのつもりだけど。

友達 A 出たって疲れるだけだよ。バックレちゃおうぜ。

ナレーション おれは、すぐ「ちゃんと出たほうがいいよ」と言えなかった。悩んでいるうちに一緒にサボると決められてしまった。

モノローグ 何でこんなに、人を気にしてしまうんだろう。自分の思ったことをはっきり言えないんだろう。あーあ、サイテーだ。

ナレーション 心の中でそうつぶやきながら、おれは友達と帰った。もちろん後ろでだれかがじっと見ているとは気づかずに…。

哲也 ただいま。

母 お帰り。今日は早かったわね。

哲也 うん。練習休みだったんだ。じゃあ宿題があるから。

モノローグ あーあ、おふくろにもウソついて…。

ナレーション おれは逃げるようにして母の前を去った。もう何事からも逃げ出したい気持ちで一杯だったのだ。机の上にカバンをほうり投げると、何かが落ちた。拾ってみると、この前妹がくれたカードだった。

モノローグ 「すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないのゆえに、値なしに義と認められるのです。」(ローマ人への手紙3:23、24)

ナレーション 「すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず…」なぜかこの言葉が引っかかってしょうがなかった。夕食後、宿題をやっていると電話がかかってきた。

(効果音) (電話音)

哲也 だれか取ってくれよ、まったく。はい、もしもし村上ですけど。

監督 (フィルター音) ああ、村上か。安西だ。

ナレーション それは野球部の監督、安西先生だった。ふっと嫌な予感が走った。

監督 (フィルター音) お前の素行が余りよくないので、この際、野球部を辞めてもらう。

哲也 え、た、退部ですか？ どうしてですか、監督？ おれのどこが…。

監督 (フィルター音) それは自分の胸に聞いてみれば分かるはずだ。わたしの目は節穴じゃないぞ。おうちの方には、次の三者面談の時に、担任の山口先生から話してもらおう。残念だがほかの部員の手前、こうしないと示しがつかんのだ。もっと聞きたければ明日学校で話す。じゃあ。

モノローグ (エコー) おれが、退部？ 退部？(多重エコー)

ナレーション おれは、頭の中が一瞬真っ白になって、受話器を持ったまま、ぼう然とその場に立ち尽くした。

<後編>

(効果音) (電話音)

監督 (フィルター音) ああ、村上か。安西だ。

哲也 え、た、退部ですか？ どうして？

ナレーション おれは、頭の中が一瞬真っ白になって、受話器を持ったまま、ぼう然とその場に立ち尽くした。

(音楽) (暗く激しい感じ)

ナレーション おれ、村上哲也。青春高校1年。中学の時から自分の性格に嫌気が差していた。というのは、俗に言う“八方美人”なのだ。高校に入ったらこの性格を直そうと思っていたのに、全然ダメだった。その上、合宿の夜、親友の上木茂の誘

いに乗って、学校を抜け出しカラオケで遊んだのがバレて、野球部を辞めさせられたのだ。このことは、三者面談でおふくろの耳にも入った。担任の先生が言うには、監督は、合宿中抜け出したことも知っていたのみか、この前練習をサボったのも見ていたので、ほかの部員の手前、こういう結論を出したというのだ。ショックだ！

母 哲也、まったくもう、どうしちゃったのよ。いけないと分かっているでどうしてそんなことするの？ 野球はあんなに好きだったんでしょ？ まだ1年生だというのに、しっかりしてよ、まったく。

ナレーション 母の言葉はグサグサとおれの胸を刺した。家に着いたおれは、さっさと2階へ行き、ヘッドホンを着けボリュームを一杯に上げた。耳元ではロックがガチャガチャ鳴って、頭がガンガンしてきたが、それでもよかった。

(音楽) (ロック音楽)

ナレーション 今すぐ、どこかへ逃げ出したい気持ちで一杯だった。次の日も、また次の日も、学校へ行くのが日増しに苦痛になってきた。親友の茂も何となくおれを避けていた。自分だけでなく、自分が誘って巻き添えに退部させたおれに、後ろめたいんだろうと思って、おれも黙っていた。

(効果音) (終業のチャイム)

担任 ではこの続きは、明日の授業でするわね。じゃあ終わりにします。

生徒 起立。気をつけ。礼！(ガヤ)

担任 あ、村上君、ちょっと職員室まで来て。

哲也 はい。

モノローグ 何だろう。あのあと、別に何もやってないぞ、おれ。

(効果音) (職員室の戸が開く音)

哲也 失礼します。

担任 ああ村上君。そのイスに座って。君を呼んだのは、ちょっと聞きたいことがあったからなの。

哲也 何でしょうか。

担任 うん。話したくないかもしれないんだけど、この前の野球部の合宿のこと。村上君は上木君と一緒にだったって言ってたわよね。

哲也 はい、そうです。茂が「遊びに行こうぜ」って言ったので、つい…。

担任 やっぱ。ちょっと落ち着いて聞いてほしいんだけど、上木君は、安西先生に、「村上君が誘ったから行ったんだ」と言ってるのよ。よく事情を知らない先生は、この前、普段の部活の時にも、君がサボったのを見てるから、彼の言うことを信じて、村上君だけを退部にしたみたいなの。

モノローグ あいつが…。茂がおれのせいにしたのか!?

ナレーション ガーンと頭を殴られた気がした。信じられない。おれを無理に誘っておきなが

ら、バレると罪をおれになすり付けて、自分は悠々と部活を続けてるなんて。親友だと思っていただけに、ショックは大きかった。

モノローグ
ナレーション

あの野郎！ きたねえ！ 人なんか信じるか。だれも信じないぞ！
その日以来、おれは、茂とは一切口を聞かなくなった。さすがに気がとがめたらしい茂が、父親同士が友達ということもあって、彼の父を通しておやじに頼んだらしく、「茂と仲直りしろ」と言われたが、だれがしてやるか。
土曜日のことだった。夕食を食べ終わったあとで、母と妹の美智子が話していた。

母

美っちゃん、明日も教会学校行くの？

美智子

うん、行くよ。まみちゃんと約束したんだもん。

母

まみちゃんって、美容院の子でしょ？

美智子

うん。まみちゃんはね、兄さんも一緒に来るんだよ。

哲也

え？ 美容院のって原田んち？ じゃあ順一も行ってんの？

美智子

うん、そうだよ。あ、そうかあ、まみちゃんの兄さんって、お兄ちゃんと同じクラスなんだ。

モノローグ

そうか。あいつも行ってんのか…。

ナレーション

原田順一は、クラスの中で、女の子だけでなく、だれにも優しいというので評判だった。今時珍しいやつだと思ってたけど、ひょっとして教会に行ってるせいかな。

美智子

ねえ、お兄ちゃん。明日、暇？

哲也

もう部活ないから暇だけど。

美智子

じゃあ、あたしと一緒に教会行こ。

哲也

母さんを誘えばいいじゃんか。

母

それがダメなのよ。お父さんと川崎のお婆さんのところへ行くって言ったでしょ。

哲也

そっか。でも教会だろ？ どうしよっかなあ。

美智子

教会、嫌いなの？

哲也

嫌いじゃないけど…。おれなんか行ったってなあ…。でも…。うん、分かった、行くよ。

ナレーション

どうしてそういう返事をしたのか自分でも不思議だった。いつもは、誘われて乗ってしまっただけで後悔するのに、今度は少しも後悔していないばかりか、何か気持ちが楽なもの、余計に不思議だった。

(音楽)

(軽快な感じ)

ナレーション

次の日はすばらしい青空が広がっていた。おれと美智子は両親に見送られ、教会へと向かった。

田川牧師

いらっしやい。よく来たね。わたしは牧師の田川です。美智子ちゃんのお兄さん

かな？

哲也 はい。

牧師 じゃあ、この席に座って見ててください。今から教会学校という、幼稚園から小学生までの集会があるんです。

ナレーション そう言って牧師さんは、おれを前のほうの席へと案内してくれた。小さい子供たちが、ニコニコしながら歌うのを見て、おれは心が洗われる思いがした。

(音楽) (子供賛美歌。BGMで)

ナレーション びっくりしたのは、中学の時の同級生で、この間久しぶりにあった前田るり子も来ていて、子供たちに神様のことを話していたことだ。クリスチャンらしいって聞いていたけど、この教会だったなんて。集会が終わってから、原田が話し掛けてきた。

原田順一 おれさ、美智子ちゃんぐらいの時から、この教会来てるんだ。

哲也 そっか。原田が来てるとは思わなかったから、美智子から聞いたときはびっくりしたよ。

ナレーション そんなことを話しているうちに、大人の礼拝が始まった。ふと見ると、前には前田さんが座っていた。何曲か歌ったあと、牧師さんのメッセージがあった。

牧師 皆さんは今の生活に満足していますか？ 疲れている人はいませんか？ 仕事で疲れている人、人間関係で疲れている人。忙しいこの日本の国では多いと思います。体力の疲れは、寝てしまえばある程度取れますが、心の場合どうでしょう。寝れば取れますか？ そう簡単にはいきませんねえ。それは、意外と心の深いところに原因があるからです。

哲也 “まるでおれに言っているみたいだ”と思った。そう、おれは自分の性格のことで悩み、そこへ親友の茂にも裏切られて、今、すっかり疲れ切っていた。

牧師 特に人間関係で悩むときの原因は何でしょう？ どんなときに、皆さんは心に疲れを覚えますか？ 疲れを覚える人には、どうも二つのタイプがあるようですね。一つは、何でも自分の思ったとおりにならないと気が済まないタイプ。自分の考え、意見をゴリ押ししようとする。でもそこに、いろんな反対や敵意とぶつかって疲れてしまう。もう一つは正反対。何でも人に合わせてしまうタイプ。人によい面を見せたい、人に嫌われたくない。そんな思いが、無意識のうちに自分を人に合わせようとするんですね。でもそれは、本当の自分を無理に押しさえつけてるんですから、だんだん疲れてくる…。

モノローグ あ、それ、おれだ。おれのことだよ。どうすりゃいいんだよ！

牧師 でもね、皆さん。この二つの全く違うようなタイプの人も、実は一つの共通点があるんですよ。それは、“本当の自分を人に知られるのが怖い”という思いです。どんなに強そうに見える人も、本当の自分がいかに弱いものか知っている。また、どんなに自分をよく見せようとしても、本当の自分がどんなに自己

中心で、醜いものか、ほかならぬ自分自身が一番よく知っている。でもそれを知られないために、人は必死に本当の自分を覆い隠し、時にはその自分を守るために、人を責めたり傷つけたり、自分の過失を人のせいにしたりする。この醜い自我の塊を、聖書は“罪”と言うのです。

ナレーション おれはその時、ふっと茂のことを思った。おれは裏切ったあいつを憎んでいる。でも、ひょっとして、おれもあいつも、心の中は同じじゃないのか？ すべての人は罪を犯した。「…

牧師 人は、この汚い自分を隠そうとして、自分を繕い、鬨い、そして疲れます。でももし、「そんなありのまんまの姿でいい。そのまま、身を任せなさい」と言う方がいたら、あなたはどうしますか？ 「わたしが、あなたを休ませて上げる」と言ってくださるお方がいるとしたら？ この方こそ、神の御一人子、イエス・リストなのです。

ナレーション おれは、集会が終わってからも、しばらくボーっとしていた。こんな体験したのは生まれて初めてだ。何か、目に見えないすごく大きな人が… 多分、それは神様だ。その方が牧師さんの口を借りて、おれの心の中をすべて洗い出して、今おれを優しく呼んでくれてるような、そんな感じだった。

順一 村上、どうだった？

るり子 哲也君。はね、茂君、ゆうべわたしんちへ来たの。自分も野球部辞めるって言うのよ。1時間ほど話したんだけど、あなたに本当に悪いことしたって。ポロポロ涙流して泣いてた。

哲也 茂が？

るり子 ええ。彼を赦すかどうかは、哲也君が決めることだけど、でもわたしはいつも思ってる。“人を赦す前に、赦されなきゃならないのは、この自分じゃないかな”って。

順一 そうだな。僕も今日の説教を聞きながらまみがくれたカードの聖書の言葉を思い出してたよ。「すべての人は罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、(るり子、一緒に暗唱)ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないのゆえに、値なしに義と認められるのです。」

るり子 わたしも中学2年ごろから、自分の嫌な性格に死ぬほど悩んで、中3の夏のキャンプでイエス様を信じて、変えられたわ。

哲也 そうなんだ…。

順一 僕ってそうさ。以前の僕は、人から受けることばかり考える、ものすごいわがままな人間だった。

哲也 原だ、お前がかよ？

るり子 わたしたち、ありのまんまの、本当の自分でいられるには、どうしてもイエス様が必要なのよ。

ナレーション

前田さんの言葉は、何か、すごい説得力で、おれの心の底に響いてきた。

モノローグ

そうか。そうなんだ。

ナレーション

まぶしいような二人の顔を見ながら、おれはそっと心の中でつぶやいていた。

<完>